

蛸子善悦 会員



ひと月ほど前まで、彼が住みついていた小田急沿線の「小野路」は、田島が果しなく続く多摩丘陵地帯の一角であった。家の周辺には蟹が飛び交い、郭公鳥の声が一面に生繁げる孟宗竹にこだまする山間のすべてが、彼の庭のようなところであった。住居横の空地に古材を使って、一人で建てた五坪くらいのオリジナルなアトリエの中で、あの「人間地図」から「赤い静物」に至る数多くの作品が脈々として生まれていたのである。「小野路の良さは捨てがたいのだけど、格好なところをみつけたので引越すことにしたよ」と、先頃訪ねたときに話していた。今回、アトリエ訪問の取材で、はからずも新住居を訪ねる機会を得たのである。

相模大野から江の島線に乗りかえて二つ目の駅「中央林間」。数少ない駅前の店は、すでに閉じていて物淋しい。目あての幼稚園をようやく探しあて、「あの外人ハウスの2軒目です」と教えられてほっとする。夕方から降り続いた路面の水たまりに、時折雷光が怪しく写ると周辺の雑木林が黒い姿をポーッと現わす。垣根越しの予期しない強烈な犬の声に逃げ腰になっていると、ベランダの中から「よーっ」と彼の声。またしても彼は、田園に住みついていたのである。午後9時、約束の7時を大中に破ってのふらちなアトリエ訪問となった。

ぎっしりと詰った本棚、幸子夫人の作品も混じえて、所せましと絵が掛けられたリビングキッチンを通り抜けて応接間へ入ると、「馬と道化」「花」「赤い静物」など濃密なマチュールの作品が、あちこちに置かれたドライフラワー、陶製の洋人形達や燭台と融合してやわらかい白燈の中に浮出し、ちょっとしたヨーロッパを感じさせる。中でも、一粒種 Mario 君のための彼手製のカラフルな魚のモビールが、印象的であった。

すっかり冷えてしまった円卓のごちそう（申しわけない）を囲み、幸子夫人も加わってまずは乾杯。話かはす

む傍では、まるで藤田嗣治の作品のような子猫が艶かな毛並みの親猫の尾にじゃれつき、ひとつの椅子を占有している。小野路の頃8匹もいた猫たち、旅行するときには猫の世話人を探がすのに苦勞をしたほど、彼の生活と猫の話は切りはなすわけにはゆかない。「のろまのナキブ（猫の名）は引越直後、出たきり帰えってこなかった」と笑いながらも淋しそう。「最近、隣家に住む米人夫妻から黒犬をもらい2匹の子を産んで仲間入りをしている」というから、結構にぎやいだ生活だ。

「実に華麗なる失敗作……」と、今年の国展出品作を評したY氏の名言の通り、彼の心象風景はまさに新しい領域を方向づけながら定着されていて、佳作であった。

「僕には大げさに気張ったものは不必要さ、生活の中で心に入ってくるすべてのもの達が作品の要素になってくれる」、小野路での6年間の生活の中で、大自然も人も人形も、器物もすべてがひとつの「静物」の中で完全に融合され、「人間地図」からのみごとな変貌ぶりを示しているのである。午前3時。すっかり話し込んだものだ。

翌朝、住居から5分ほど離れたアトリエに案内してくれた。大きな倉庫ふうの2階20畳の壁は、真白く塗られ作品が一杯。こんもりとひねり出された大きなパレットの絵具をみながら、「アトリエが離れているのも、けじめがついて良いもんだよ」という。

昨夜に変わり、澄みきった青空のもと、かげろうの立ち込める雑木林の中通を通り抜け、駅まで送ってくれた。折りしも厚木基地から飛びたっらしい大型機の不協和なごう音を、どんなふうに彼の心はとらえてゆくのだろうか……。



訪問者 渡辺真利 会員



竹岡羊子 会員

緑の芝と樹木につつまれて、団地の箱が林立したような都市空間の整然とした緊張感を肌にしなが、マンションの冷たい階段を登り、4階の竹岡さん宅にたどりついた。

室内は外観とは対象的に、住居のきれいなホットムードの居心地のよさにほっとする。竹岡さんのアトリエはこぎれいな小さな部屋である。画面で見ていた豊富なえのぐの駆使は想像できぬほど、一滴の飛沫も床にはないのに驚いた。大作は、よその広い場所を借りて描きに行くのだという。

竹岡さんの最近の生活は、たえず行動的でエネルギーなのである。話し方も活発だが、年間の展覧会に出

品する度合いも旺盛で、訪問したときも、独立の選抜展を終え、九州での個展に飛び、その足で台湾に行ってきたという。この団地の隅にチョコネンと坐って絵を描いている人の現実と、その行動範囲の広さは奇妙な対比を感じさせた。そして、最近の竹岡さんの絵は、華麗な、そして寓話的で虚構的パターンの中に、実在感がしっとりとさりげなく浸透しはじめ、とみに色彩は明るく、しかもタブローの密度と洗味が、静かに停滞されて重味も加わってきているように思う。画面外に向って掘げられてゆくような、柔難な空間的ふくらみが増して、その充実傾向がうかがえた。しかし、当人はまだまだ表現がなまぬく幼稚なのだとか、構成員をつけねば半面造形の底の浅さが見えすいてしまうとか、自省のいましめで気をもんでいる。

竹岡さんは、私より数年先輩である。如才ない陽気な気風であるように見る人が多いが、それだけでない感性の鋭さは、画家としての確固とした姿勢を秘めているからだろう。外部の事象をたえず見通しながら、現況を感受しているように思われる。芸術の感性を媒体に生きる女性として、当然のことかもしれない。だが、女性としての限界を痛感するそうであるが、反面、女性独特の表現範疇のある強みを強調する。だが、その意識をもった作品は、見るにしのびない軽薄さを感じさせてやりきれない。全く無意識に取組んでいる方がよいという。

2年ほど前のヨーロッパ遊行で受けた造形の厳しさと、その表現の適確さに打ちのめされたそうだが、今はマイペースを取戻して快調の様子であった。執念のような画面への没頭は、その円熟期を思わせるに充分であった。しかし、まだまだ求めるものには貪欲な作家であらう。活発さは若さをひめる所以であるようだ。

1971年5月27日

訪問者 岸本裕躬 会員



福井正治 会員



1. 穂別から厚真へ転住

彼はこの4月、長年住んでいた穂別から、隣接の米作地帯厚真へ移った。住宅が狭くて絵など描けないとこぼしていたが、それがどうなったか。5月某日、使命を帯びて彼を訪ねてみると、幸なことに、もと穂別中時代仕えていたK校長とまた一緒になったおかげで、彼のため

に準備室の提供が決まり、そこがアトリエ代りにもなるというので、ホクホク顔であった。16坪くらいの大きさ。

2. 制作の秘密

この部屋の窓際に、彼の机がある。油絵のパレット、ガッシュのパレット、その他もろもろの用具が置かれている。その前の壁には、ガッシュの小品が20数点、画鋏でとめられている。ハガキ大のものから、倍大、3倍大のミニ級作品である。青、緑、黄の色調と、点々切れ切れのリズミカルな線描、内容は、人と鳥、人と花、人と馬とかである。これらは独立した作品でもあるが、大作のためのエスキースのような役目を持っている。そしてこのエスキースが、いきなり大作に総合されるところが、ぼくには興味がある。

それに彼の大作は、カンバスというものを使わないで手製の枠にベニヤを張ったり、そのベニヤに布をはったりする。今も、この部屋に20号がある。一週間ばかりかかって作ったのだそうだ。

ぼくは彼が、カンバスを買う金があれば、酒にかえて飲んでしまうので、止むなく手製のものを作るとばかり思っていたのだが、半分は、手製のものを作る間に、大作の構想が次第にまとまるのではないかと考えられるのだ。

旧作が2枚ある。1枚は週刊朝日の表紙になったものだ。もう一作の前に彼を立たせたり坐らせたり、カメラをパチパチ。しかし、帰ってきて写真屋さんで現像してもらったが、全部だめだった。訪問失格である。

訪問者 遠藤未満 会員

佐藤忠良 会員

「わからなかったら角のガソリンスタンドで聞けばすぐわかるよ。自宅とは別だから佐藤忠良のアトリエの方ってね」。思いがけず気さくに道順を説明して下さった先生にほっとしながら、井の頭線永福町を降りて、ガソリンスタンドを目印にアトリエらしき建物を捜して行くと、目の前に鉄筋コンクリートの大きな建物が浮かび上がってくる。染一つない真っ白いアトリエ、黒い鉄柵の門、雨にぬれた美しい緑の芝生、この3つのコントラストが、あたりの建物とは対比的にエキゾチックな風景を作り出している。「いいなあ」。思わず門の前に立って感

歎する。

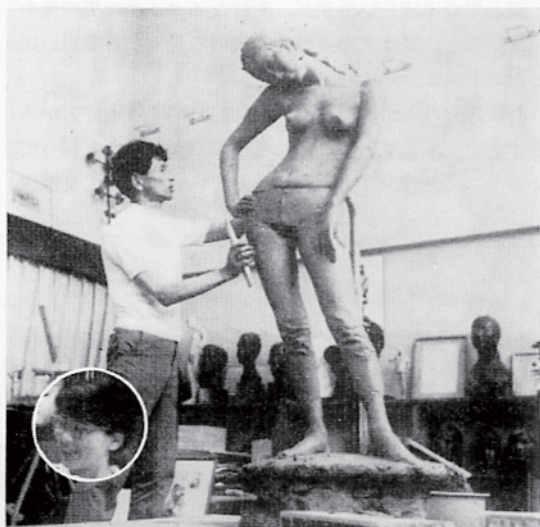
中に入ってまた驚いた。中2階もなく、ほとんど真四角で全く機能的にできているアトリエである。26坪というのに、まるでローラースケートでもできそうな広さを感じるのである。高い天井には、2m四方の大ガラスが10枚も張りつけてあり、外の光線を余すところなく室内に送り込んでいる。中央には、「現代国際彫刻展招待作品」が、九分通り出来上っておかれている。

ふと気づく、と私の大好きな「ふざけっ子」が、あどけないポーズをとって踊っている。思わず両手でなでま

わしてしまふ。

2つの学校の教授をしておられる先生は、若い世代に対するご理解が深い。しかし、現代の学生運動を美術の分野にまで、まかり通らせようとするはき違い、また技術と表現の世界の厳しさを棚上げにして、一方的な理論で教師を批判したりつるし上げにしようとする傲慢な態度には、厳しい批判の目を向けられる。

私は以前、本郷先生訪問記を書いたことがあるが、今佐藤先生に接してみると、お2人の作家に共通して感ずることは、青年のような、たんたんとした若さを持っておられることである。本当の作家には、精神的なポーズがない。お会いして、実に楽しい。しかし、一たん作品に立ち向われると、何びとをも寄せつけない厳しさと人間的密度があり、私のような者は、思わず2歩も3歩も退いてしまうのである。「今度は新国芸術論でもしましょうか」、「先生、とても、とても」。私は這々の態でおいとます。楽しいアトリエ訪問であった。



訪問者 新国美津 会員

菊地 精二 会員



5月の雨の日、世田谷の等々力駅近く、東名高速出入口がすぐ近く、というのに落ち着いた緑の多いすてきな住宅地、グレーのアトリエがすぐわかる。

昔、札幌の中根邸での洋画研究所の先生のメンバーでいらした5人の画家のうち、菊地さんにだけは一度も教えを受けずに終わったが、やはり何となく今でも先生のような気がする。お目にかかるのは十数年ぶりである。

通されたアトリエの真中のイーゼルには、100号のイタリアの男の像が目下制作中、周囲の壁に掛けられてある新旧の作品も、ほとんど人物である。それら作中の人々の見おろすアトリエで、菊地さんは熱っぽく話される。

「セザンヌ、ゴッホ等、自然を見つめて制作した偉大な画家はたくさんいたが、僕は、僕がはじめて見る自然を大切にしたい。自然の存在感を、実在感を表現したい。昔は抽象、シュールをしたこともあるが、今は具象で表現するのが自分にあっていると思う。来年は個展の予定もあり、これから小品も描きためたい。油絵は、やはり絵具をたくさん使って描かなければだめだ。薄描きもいいが、それは絵具をすっかり征服してからのことだ。今月末からハンガリーの女性を60号に描く。外国の人を描くのは、モデルを探すのがむづかしいのだが、僕は幸い世話をしてくれる人があり、描く機会に恵まれる」。

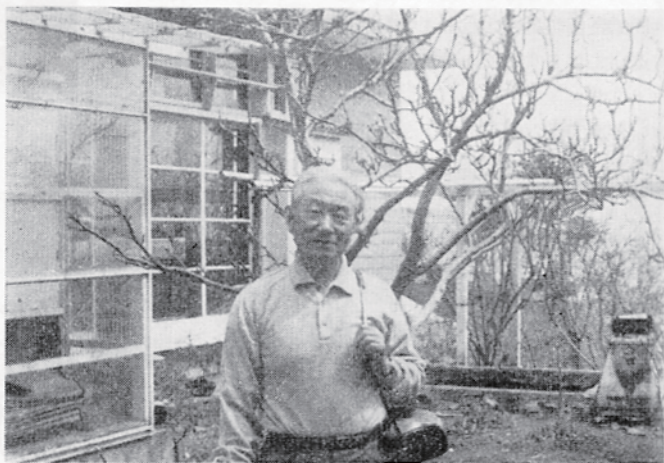
■ アトリエ訪問

黄と黒のはげしい色調が、新鮮なイタリアの男の像を見ていると、私は北海道の冬の吹雪の荒々しさを思い出したのである。

外国旅行のとき、日光浴の美女に目がくらみ、力が入りすぎてシャッターがこわれてしまったお話など伺っているうちに、謹厳な方と思い込んでいたのが、大変愉快

なユーモラスな、やさしい方であることがわかってきた。多分菊地さんは、今でも25歳くらいのおつもりなのではあるまいかと想像した。とても楽しい訪問であった。

訪問者 岸 葉子 会員



池谷 寅一 会員

はこだて公園の裏。

新緑の細道を登り切ると、朱色の屋根の池谷さんのアトリエがある。

大きな藤棚の下をくぐり、石段を上る。石南花や八重樺、香りのつよい沈丁花、いろいろな花の咲いている庭である。この家の主人の優しさを感じられる。

4畳敷の座り居間続きのアトリエ、大きな窓いっぱい津軽海峡を見下して、街が見える窓枠が額となり、まるで池谷さんの絵のように見える。

壁には4、5枚の大作がかかっている。床にも小品が重ねて、おかれている。

画架もパレットも筆も、そのまわりも、よく整頓され隣りの部屋で奥さまが、生花を教えておられて、静かな落ち着いたアトリエである。池谷さんの雰囲気はピツタリと感ずる。

「自然を愛し、自然の姿を愛情をもって描くことを自分の途として40余年、一貫して描きつけてきた」と氏

は語る。いかに傾向の流れが変動しても、「自分は自分の好む途を歩む他なし」とも話す。この言葉には、氏の秘められた静かな情熱がある。

現代のように名を売ること、作品を売ることが第一とし、ややもすると、実力の伴わない人の多いときに、池谷さんはただ黙々として自分の絵を描き続けている。

本当に描くことの好きな人である。

現代には珍らしく無欲な人である。その所為か、齢70になるのに、いかにも若い人である。

作品も売ることをあまりせず、個展も開かず、40余年描き続けているのだから、作品も随分と貯ったことであろう。

このあたりで、欲を出してもらいたい。大個展を催して、皆に作品を見せてほしいものである。

訪問者 岩船修三 会員